

世の中へ出る子供たち

小川未明

青空文庫

一

正吉しょうきちの記憶きおくに、残のこっていることがあります。それは、小学校しょうがっこうを卒業そつぎょうする、すこし前のことでした。ある日ひ、日ひごろから仲なかのいい三人にんは、つれあって、受け持ちうけもちの田た川がわ先生せんせいをお訪たずねしたのであります。先生せんせいは、まだ独身どくしんでいられました。アパートの狭せまいへやに住すんでいられて、三人にんがいくと喜んで、お茶ちやを入いれたり、お菓子かしを出だしたりして、もてなしてくださいました。

「君きみたちの卒業そつぎょうも、だんだん近ちかづいたね。もうこれまでのように、毎日まいにち顔を合あわせることができなくなる。小原おばらくんは、入はいる学校がっこうがきまったかね。」と、一人ひとりの方ほうを向むいて、おっしゃいました。

「はあ、兄にいさんが、中学校ちゅうがっこうへ入はいつたらいいというのですけれど。」と、小原おばらは、下したを向むきました。

「君きみのお兄にいさんは、やさしい方かただ。君きみは、もつと体からだをじょうぶにせんければいけんよ。」
先生せんせいは、じつと、早くはや両親りやうしんに別わかれた小原おばらの細ほそ々とした体からだを見ていられました。

高橋は、早く父親に別れたけれど、母親があるのでした。正吉だけは、両親がそろっていて、いちばん幸福の身の上であつたのです。

外には、寒いから風が吹いていました。ときどきガラス窓をガタガタと鳴らしました。先生は、しばらくだまつていられましたが、

「みんなは、世間に名を知られるような、えらい人になれなくともいいから、正しい人間となつて、どうか幸福に暮らしてもらいたい。」といつて、うつむかれたが、そのとき、目の中に涙が光つたのです。先生のお言葉は、胸にしみて、思わず知らず、三人は、いっしょに頭を下げました。

二

それは、つい、昨日のこつのようなのが、もう四、五年もたちます。小学校を出てから、三人の身の上にも、変化がありました。中でも気の毒なのは、小原で、体が弱くて、中学校を退きました。正吉も、また最近母を失つて、年をとつた父親だけとなりましたが、工手学校を出ると、すぐ勤めています。高橋は、このほどようやく

工芸学校を卒業して、田舎へいくことになったのです。

正吉と高橋は、同じ種類の学校でありましたので、平常も往來をして、自分たちの希望を物語ったり、身のまわりにあつたことなどを打ち解けて、話し合つたのでした。

「僕のお母さんはね、昔の芝居が好きなんだよ。だけど歌舞伎座なんて、高いだろう。それに、いく暇もないのさ。僕と妹のために、盛り場さえめつたに出られなかったのだね。僕は、お母さんが達者なうちに、すこしは樂をさしてあげたいと思うのだけれど、おぼつかないものだな。」と、ある日、高橋は、正吉に向かって、いいました。

「しかし、お母さんは、お達者なのだろう。」

「ああ、病氣つてしたことがないよ。それも、二人の子供を自分の手で養育しなければならぬので、気が張っているんだね。」

高橋は、そう答えました。正吉は、お母さんのことを考えると、すぐ、涙が目にあふれてくるのです。

「僕も、一度お母さんを、湯治にやってあげたいと、思っているうちになくなられて、もう永久に機会がなくなつてしまった。」と、正吉は、歎息をもらしました。

「しかし、君には、まだ、お父さんがあるからいい。せいぜい孝行をしてあげたまえ。」
なくなつた母親を思い出している、さびしそうなお友だちの顔を見ると、高橋は、
こういつてなぐさめたのです。

もう、季節は、秋の末でありました。正吉は、高橋を見送るため、門から出まし
た。短い日ざしは、色づいた木立や、屋根の上に、黄色く照り映えていました。

「高橋くんも、こちらに勤め口があるといいんだがな。」

正吉は、ただ、近く別れるのが悲しかったのでした。こちらに、思わしい就職
口がないので、高橋が、地方へいくのを知っているからです。

「雪は、深く降らないけれど、僕のいくところは、冬の寒い田舎なんだよ。大仕掛けの堤
防工事なんだがね、そこへしばらくいくつもりなのだ。ただ母と妹を残していくのが、
なんだか気がかりなんですね。」と、高橋は、いいました。

「そう長くは、いつていないのだろう。」

「ああ、しかし、こちらにいい口があるまでは、どの途、しかたがないのさ。」

「きつと、そのうちにはあるよ。」

「僕たち、若いうちに、いろいろ経験するのもいいかもしれない。」と、高橋は、肩

をそびやかして、答こたえました。

「そうさ。僕ぼくも、満洲まんしゅうへいこうかと思おもつたんだ。しかしおふくろを失うしなつて、間まもないので、父ちちがさびしがると思おもつたので、見合みあわせたのさ。」と、正吉しょうきちは、西にしの紅あかく夕焼ゆうやけした、空そらをながめていいました。

三

正吉しょうきちは、月給げつきゆうの入はいつた翌日よくじつのこと、田舎いなかへいく高橋たかはしのために、送別会そうべつかいを開ひらくことにしました。

あるレストランで、高橋たかはしと小原おはらと自分の三人にんが、夕飯ゆうはんを食たべながら親したしく話はなしをしたのです。そのレストランは、大おおきなきれいな店みせでありました。暖房装だんぼうそうち置ちもあれば、壁かべにはオゾン発生機はっせいきを備そなえてあつて、たぐさんのテーブルには、それぞれ客きやくが対むかい合あつていました。南洋産なんようさんの緑色みどりいろの葉はの長ながい植しょくぶつ物ぶつが、大おおきな鉢はちに植うえられて、すみの方ほうと、中ちゆうおう央おに置おいてありました。

正吉しょうきちは、勤つとめるようになってから、こんな場所ばしょへは、先せんぱい輩はいにつれられたり、また

社員たちときたことがあるけれど、小原も高橋も、きわめてまれなことだけに、話の合間に、頭を上げて、あたりを物珍しそうにながめていました。

話は、正吉と高橋の間で、いつかまたお母さんのことになったのです。ここでも小原だけは、母の顔さえよく覚えていなかったもので、二人の話を笑ってきくうちにも、どことなくさびしそうでありました。

「わがままいわなければ、よかつたと思うよ。お母さんがいなくなつてから、わかつた。しかし、もう遅いのだ。よく無理をいつたり、また頼んでおいたことを母が忘れたといつて、小言をいつたりしてすまなかつた。」と、正吉はいつていました。

「僕も、悪いところでなければ、母と妹をつれていくんだけれどなあ。」と、高橋がいきました。これを聞いていた、小原は、

「いいなあ、君たちが、うらやましいよ。僕には、そうした思い出もない。小さいときから、母も父も、ないのだからね。」と、鼻をつまらせたのです。

「そう、もうこんな話はやめよう。」と、正吉が、いいました。

三人は、フライだのマカロニだの、いろいろ食べたたり、サイダーや、コーヒを飲んだりして、時計が九時を過ぎてから、そこを引き上げました。会計は、少女の持つて

きた伝票でんびようを見て、正吉しょうきちが、払はらったのであります。

道順みちじゆんで、高橋たかはしが先に二人ふたりと別わかれました。

「出発しゅつぱつの日ひには、送おくるからね。」

「会社かいしゃが、忙しいなら、いいよ。」

「なに、どうか都合つごうするさ。」

あとは、小原おばらと正吉しょうきちの二人ふたりが、星晴ほしはれのした空そらを、公園こうえんの方ほうに向むかって歩あるいてい
たのです。

「今夜こんやは、ご馳走ちそうになって、すまなかつた。」と、小原おばらがいました。

「なんでもないよ。今度こんどの日曜にちように、動物園どうぶつえんでもいつてみない？」と、正吉しょうきちが、い
うと、

「お天気てんきだったからね。」と、小原おばらは、喜よろこびました。そして、赤いあかネオンサインの方ほうを見みな
がら、

「四月がつになったら、また学校がっこうへ上あがるつもりだ。」と、このごろ、体からだがよくなったので、
小原おばらは、元氣げんきにいました。

「学校がっこうなんか、すこしくらいおくれたっていいよ、なるだけ大事だいじにしたまえ。」

ふたり
二人は、四つ辻のところで、また別れたのです。先刻から、正吉の頭の中で、もやもやしていたものがあります。それは、レストランの計算が、ちがっているような気がしたのでした。なんだかすこし安すぎるので、正直な彼は、そのままにしておけない気がして、公園のベンチのところでポケットから、手帳と鉛筆を取り出して計算をはじめました。頭の中では、うまくいかなかったのです。

「ああ、やはりサイダー二本がつけ落ちになつてゐる。これは、あの少女の損になるのだろうか。」

正吉が、食べ物や飲み物を運んできた、目の星のように清らかな、白いエプロンをかけた少女の姿を思い浮かべました。彼は急いで街へひきかえしました。そして、時計を見ると、もう十時を過ぎてゐます。

「いつのまに、こんなに早く時間がたつたろう。」と、つぶやきながら、例のレストランの前へくると、もう店は閉まつてゐました。なにか仕事があつて、一人おくれたのか、普通の娘さんのようなふうをした丸顔の少女が、横の入り口から、出たのであります。正吉は、その少女を呼び止めた。

「すこし会計が、ちがつていたのですが。」と、いいました。

「私にはわかりませんが、なにか余計にいただいたのでしょうか。」と、少女が聞きました。

「いや、サイダー二本の、つけ落としがあつたと思うのです。」

こういうと、彼女は、正直な人だと思つたらしく、軽やかに笑いました。

「こちらの手落ちなんですから、かまいませんよ。」といいました。

「受け持ちの女給さんに、損をかけまいと思つてきたのです。」

「まあ、ごしんせつに、けつして、そんなことはないんです。それに、もう、みんなしまつた後ですもの。」といいました。

正吉は、そう聞くと、いくらか気持ちになりました。急いで、駅に入ろうとしたときに、夜遅く、寒いのに、外に立ちながら、花を売っている少女を見ました。やはり家のために働いているのであろうが、あまり振り向いて見るものすらありません。

「そうだ、あの金で、この少女の花を買つてやろう。」

正吉は、白い百合の花と、赤いカーネーションの花を求めました。彼は、駅の階段を上りながら、

「たとい、一銭でもまちがつた金は受け取つてはなりませんよ。」と、教えられた、お母

さんの言葉^{ことば}を思い出し^{おも}ました。もうそのお母さん^{かあ}は、
いが、お母さん^{かあ}の教え^{おし}だけは、かならず守^{まも}りますと、
て、誓^{ちか}ったのであります。 この世界^{せかい}のどこ^{どこ}を探^{さが}してもいられな
正吉^{しょうきち}は、お母さん^{かあ}の霊^{れい}に向^むかつ

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

初出：「婦人朝日」

1939（昭和14）年1月

※表題は底本では、「世《よ》の中《なか》へ出《で》る子供《こども》たち」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

世の中へ出る子供たち

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>